

横笛の恋塚

むかし治承四年（一一八〇年）、都の西八条殿で花見のとき、おきさきに仕える横笛が、さくら吹雪の中であやかに「春うぐいすのさえずり」のひとさしを舞っていた。そのとき、小松の内大臣 平 重盛の家来・二十三歳の斎藤滝口時頼は、美しい横笛の舞い姿に強く心をひかれ、おたがい愛し合うようになった。

このことを知った父親は、平家一門のさむらいと舞姫の身分のちがいをたてに取って、時頼をきびしくいさめた。時頼は深く傷ついた心で、くる日もくる日も苦しみなやみ続けた。ついに嵯峨野の往生院で出家することを決心し、名を滝口入道と改めた。横笛は熱い思いをおさえきれず、嵯峨野のお寺を訪ねた。

「滝口どの、わたし横笛……………」

と、とびらに両手をかけ、心をこめてうったえた。

お堂の中の滝口入道は、

「この世の一切のかかわりを捨てた、わたしだ。」

と、冷たくこぼんで、出てこようとしなかった。

ただおごそかなかねの音とお経の音が静かな庭にひびくだけだった。

泣く泣くお寺を去った横笛は、やがて奈良の法華

寺で長い黒かみを切り落とし、仏門に入った。

「この世のえにしをはなれた、わが身だ。」

と、心ならずもことわった時頼もまた横笛と同じ思いであった。



自分のあさはかさに気付いた入道は、間もなく女人禁制の高野山に登った。そこでさらに厳しい修行を重ねて、大円院というりっぱなお寺の第八代住職・阿浄律師となった。滝口入道のことを風のとよりに聞いた横笛は、はるばると高野山に近い天野の里を訪ねていおりを結び、今ひとたびの会える日を待っていた。

たまたま天野を通った僧から、横笛の話聞いた阿浄律師は心のあかしの和歌をおくった。

そるまでは うらみしかども あずさ弓

まことの道に 入るぞうれしき

横笛はこの和歌を受けて、

そるとても なにかうらみん あずさ弓

引きとどむべき 心ならねば

と、やさしくこたえた。

せめて女人禁制の高野山のふもと天野の里に住めばと、せつなく恋いしたったけれども、その願いもむなしく横笛は十九歳の春に、村人に看取られてあわれにもこの世を去った。横笛の病のところに、滝口入道から送られてきた和歌は、

高野山 名をだに知らで 過ぎぬべし

うきよよそなる わが身なりせば

それにこたえて横笛は、

やよや君 死すればのぼる 高野山

恋もぼだいの たねとこそなれ



と、今も変わらぬ思いを伝えた。

この和歌のとおりになくなった横笛は、一羽のウグイスとなって大円院の梅の木に止まり、しばらく美しい声でさえづっていた。やがて、よわよわしく二、三度はばたと、庭の井戸に落ちて水にしずんだ。

はっと夢から覚めた入道は、井戸からウグイスをすくい上げ、変わり果てた横笛の姿に無念のなみだを流した。滝口入道は真心こめて阿弥陀如来の仏像を造り、その中にウグイスのなきがらを納めて、あの世の幸せをいのつたと語り伝えられている。

高野町の大円院には今も、ウグイスの弥陀と梅の木と井戸が残されており、悲恋の物語に人々のなみだをさそっている。

天野の村人があわれんでとむらった横笛の恋塚は、なだらかな畑の中にいくつかの五輪塔とともに宝篋印塔が立てられて、手厚くまつられている。

※ 五輪塔……空・風・火・水・地の五つの石を重ねた仏石

宝篋印塔……りっぱな仏石